

聖書:使徒の働き17章1～15節

説教:毎日聖書を調べた

はじめに

パウロたちがピリピの町に入って福音を語ると、すぐにリディアとその家族が救われ、伝道は順調に進むかに見えました。ところが古いの霊につかれていた女を助けたことで、女を食いものにしていた男たちが腹を立て、パウロとシラスは役人に訴えられ、むちで打たれて牢に投げ込まれてしまいます。二人はローマ市民権をもっていたので、そのことを申告すればそんなひどい目にあう必要はなかったのですが、そのことは黙ったままでした。でもその結果、看守とその家族が救われていきます。人が救われるのであるならば、むち打たれてもかまわない、あえて苦しみを引き受けていく。それがパウロたちの信仰でした。

今日の箇所でも災難は続きます。ユダヤ人たちがしつこく追いかけて回して嫌がらせをして町にいらなくなるようにする。多くの人が救われて欲しいと願ってイエス・キリストを伝えているだけなのに、どうしてこんな目にあわなければならないのか。普通なら途中でくじけてしまうかもしれません。しかしパウロはあきらめない。いや、むしろますます情熱に燃えて伝道を続けていきます。その力はいったいどこからくるのでしょうか。このことは私たちにどんなかわりがあるのか。ともに考えてまいります。

1 迫害

1) テサロニケ

ピリピの町を出るとパウロとシラスは、テサロニケに向かい、いつものようにまずユダヤ人の会堂に入っていきます。「三回の安息日にわたって」とあるのでおよそ数週間の滞在だったのでしょう。その間にユダヤ人だけでなくギリシャ人たちは信仰に導かれて行きます。この人たちが後にテサロニケ教会の土台となっていくことになりました。ここでも最初は順調に伝道が進むかに見えましたが、横やりが入ります。ねたみに駆られたユダヤ人たちがならず者を集め、暴動を起こしたばかりでなく、パウロの仲間だと思われていたヤソンが巻き添えになり、役人のところに引いて行かれます。そのとき彼らはこう訴えた。6節後半から7節。「世界中を騒がせてきた者たちが、ここにも来ています。ヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、『イエスという別の王がいる』と

言って、カエサルの詔勅に背く行いをしていません。」

これは地中海沿岸のどの町でもそうであったように、テサロニケはもともとギリシャ人の町だったのですが、あとからユダヤ人がイスラエルから離散して移り住むようになりました。そうすると地元の人たちと移民として入ってきた人たちの間で摩擦が起きてしまいます。ローマ帝国はこの問題に対処するために、「カエサルの詔勅」を出しました。ユダヤ人たちが静かに暮らしている限り町に住むのはかまわないが、もし騒ぎを起こすようなことがあれば即刻町から追放するという厳しい内容です。ところがパウロたちは、「イエスという別の王がいる」と盛んに言い立ててローマ帝国に刃向かおうとしている。これが彼らの言い分でした。これはかなりインパクトがあったようで、群衆も町の役人たちも動揺してしまいます。もうこうなるとパウロたちだけでなく、町に住んでいるほかのユダヤ人も影響が拡がってしまいます。それでパウロらは夜の間ベレアに移動することにしました。

2) ベレア

そのベレアでも、いつものようにパウロはユダヤ人会堂に入り、いつものようにイエス・キリストを宣べ伝えます。そうするとこういうことが起きた。11節。「この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりにどうか、毎日聖書を調べた。」

テサロニケの人たちもベレアの人たちも、パウロから福音を聞いて信じました。そこは同じ。ところが違いが一つあった。ベレアの人たちは、パウロが言っていることが本当かどうか、毎日聖書を調べ、矛盾がない、すべてパウロが言っているとおりだったと確認した上で、多くの人たちが信じていった。そんなふうには彼らはふだんから何事も聖書を土台にして判断していたというのです。このことがどういうことか、また後で触れることにします。

2 パウロが語った福音

1) 苦しみを受け

その前に見ておきたいのは、パウロが何を語ったかです。3節にあります。「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです。」もちろん、ほかにもいろいろなことを語ったはずですが、枝葉を切り落として、一番肝心な部分を抜き出したのが3節だと考えてよい。

ここには三つのポイントがあります。一つ目は、「キリストは苦しみを受ける」ということです。ただ受けた訳ではない。どうしてキリストが苦しみを受けるのようになったのか。そこが大切です。だれか苦しみを与えた者がいたわけですから。いったいだれか。私たち全員です。私たちは生まれながらに神に対して罪を犯しています。神は公正な方ですから、罪を犯した者は必ずそのさばきます。しかし、そこで話が終わっていたのなら私たちはだれひとりとして救われることなく滅ぼされておしまい。なんの望みもありませんでした。ところが神は私たちを愛するがゆえに、さばきからのがれる救いの道を備えてくださった。キリストが私たちの身代わりとなって苦しみを受ける。もしそのことを信じるならば、あなたの罪は赦される。そのような道です。それが「苦しみを受け」の意味です。

2) 死者の中からよみがえった

パウロが語った福音の二つ目。「死者の中からよみがえらなければならなかった。」罪が赦されたら次に何が起るのか。私たちはいろんなことで悩んでいます。悩みはいろいろある。お金のこと、人間関係の悩み、家族の健康、仕事のこと、悩みはいろいろ。でも、元をたどっていくとすべて同じ所に行き着きます。人のいのちです。自分のいのち、愛する者のいのち。少しでも脅かされると感じるたびに悩みとなっていく。これが私たちの苦しみの本質です。ですから本当の救いは、必ずいのちの問題を解決するものでなければなりません。罪赦されました。でも死んで終わりです。もしそうであればそれは本当の救いではない。死んだ者がよみがえるかどうか。救いというのであれば、絶対に避けて通ることはできません。パウロはこの問題を避けるどころか真っ直ぐに告げました。キリストは死者の中からよみがえった。

3) このイエスこそキリストです

油注がれた方、すなわちキリストが苦しみを受けて、死からよみがえることが聖書に書かれているかどうか。そのことをベレアの人たちはきちん

と調べて確かにそう書かれていると確認した。そこまではよい。ひとつだけ問題が残る。では、聖書に示されているキリストとはいった誰のことなのか、です。

簡単に「私はキリストです」と口で言うことができてしまう。新興宗教の教祖の中にそういう人がいるくらいです。では本物のキリストをどうやって見分けるか。見分けるためのしるしがちゃんとある。先ほど挙げた二つのことです。苦しみを受けて死からよみがえられた。これがキリストのしるし。自ら進んで苦しみを受け、死からよみがえられた方。この二つの条件をクリアするの誰か。ただお一人しかいない。それがイエスと呼ばれる方です、とパウロは伝えました。

どうしてパウロは確信をもってそんなことを言えたのでしょうか。パウロの過去にさかのぼります。彼がパリサイ派のリーダーとして、徹底的にクリスチャンを迫害していたある日、パウロは死んだはずのイエスが自分に語りかけるのを聞く。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」「主よ。あなたはどなたですか」と尋ねると、その方は「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えられた。その声を聞いたとき、パウロははっきりと悟りました。聖書に預言されているキリストとは、私に声をかけてくださったイエスのことである。

3 何を土台として生きるのか

1) 毎日聖書を調べた

テサロニケの人たちもベレアの人たちも、パウロが語る福音は初めて聞く話です。そんな人たちに、なんの根拠も示さずに、ただ信じなさいと言ったとしたらどうなるか。単なるペテンで終わりです。そんなものは信じるに値しません。ではどうして人々は信じたのか。パウロはきちんと根拠を示しました。2節。「聖書に基づいて彼らと論じ合った。」聖書に基づいて、とあります。聖書、つまり私たちが今手にしている旧約聖書を開いて、ここにキリストのことが書かれている。そしてこのキリストこそ、イエスですと宣べ伝えました。ベレアの人たちはもっと徹底的です。たとえ有名なパウロ先生のことばであっても、決して鵜呑みにしない。聖書の一つ一つ開いてはたしてそのとおりかどうか調べて、そのとおりだとわかると信じていきました。

2) 私たちのいのち

今朝はこのベレアの人たちの信仰から大切なことを教えられます。私たちは何を土台にして生きているのでしょうか。もちろん聖書がすべての土台です。この聖書こそ私たちのいのちである。その確信をもっているかどうかです。

むかし東南アジアで活動されていた日本人宣教師の方から伺った話です。派遣される国によっては治安が悪くて、パウロのように牢に投げ込まれたり、最悪の場合は殉教も覚悟して宣教地に向かうと言っていました。迫害されたら聖書は取り上げられます。そうなったときのために、ふだんから聖書のみことばを暗記するのだそうです。迫害に遭った宣教師たちの伝記に、聖書のみことばで励まされたと書いてあったというのです。

ノアのじかんに暗唱聖句をみんなで読んでいますが、決して無駄なことではない。すぐに忘れてもいつか何かの機会に思い出されて、自分を励ますことになるかもしれません。いまはこのように聖書を開いて読むことができます。もしこの聖書に出会わなかったなら、私の人生はどうなっていたのか。そう考えるとき、神が与えてくださったみことばの恵みを覚えるとともに、もう一度このみことばに立って歩んでいきたいと願います。